

こころ日記「ぼちぼち」その②

8

脇野 千恵

なぜ、性教育なのか

現在、学校現場から離れて3年になります。小学校、中学校と32年間の臨時講師としての教員生活は、多忙さと公教育の様々な縛りとの葛藤、子どもや親のトラブルなどの対応と苦悩の連続でした。

ですが、どうして続けられたのかと問われると、月並みかもしれませんが「子どもの変化を見る喜び」と言うのが答えでしょうか。周りには学歴や研究実践など、すばらしい先生がたくさんいました。そんな教員達の中にいると、無い物ねだりではありませんが、教諭であることを羨ましく思った時期がありました。逆にそのことがバネになり、より楽しい分かる授業づくりへの努力に繋がっていったことも確かです。

そんなときに性教育と出会ったことは、大げさですが、自身の教育への視点を大きく転換させてくれるものでした。

今まで「性を人権として捉える」という

考えには及びませんでした。性教育は「命の誕生」の学習ではありません。ジェンダーや性の暴力、恋愛など、人との関係性など、人が生まれてから死までその時々テーマがあるのです。これらのことを、学習の中でどのように組み立て伝えていくのか？おもしろいと思いました。

色々な人権学習があるけれど、性教育は「包括的な人権学習である」ということが、ようやく理解できるようになってきました。

教育への切り口として、性教育をやろう。この学習なら私にもできる、誰もやりたがらないことをやってみよう決めました。

本当の理由…

女の子あるいは女性は、だれしも人生に一度は性被害に遭ったことがあるのではないだろうかと思っていました。

実は私自身、過去に男性から性のいたずらやセクハラに遭ったことがあります。女

の子だから、そういう目に遭うのは仕方がないとも思っていました。被害の重大さに関係なく、自分にも落ち度があったのだからと、そんな目に遭ったことは決して言うてはならない。いつしか心の奥深く沈め、親にも言えずに過ごしてきました。「性」について学ぶうちに、「あーそうだったんだ」と当時の被害について理解することができました。カミングアウトという言葉がありますが、時代は経ても、なお性被害をオープンにできない状況は、あまり変わっていないような気がします。

幼い時、周りの大人が結婚すると子どもが生まれるのが不思議でした。「どうして結婚したら子どもができるの？」そのままを父親に尋ねると、「大きくなればわかる」という答えが返ってきました。そうかこれは大人に聞いてはいけなかった事なんだと。小さいながら、父親の表情を察し理解したのを覚えています。

今のように絵本もネット環境もありません。自分のからだの情報などを知る手立ては、医学の本以外にはなかったように思います。あるいは、子ども同士でささやかれる卑猥なこととして知るといったことだったような…。

親や周りの大人から、性についてとちゃんと教えてもらえなかった。性をポジティブに捉えられずに大人になった私自身の経験が、せめて身近な子どもたちには、「自分のからだ」の正しい知識を伝えたいという思いにさせたのです。

「性教育事始め」

「性教育元年」の波に乗り、私は友人と性教育を研究し活動する場として、1993年にサークルを立ち上げました。

「一般社団法人“人間と性”教育研究協議

会」(性教協)という長い名前の、全国組織である民間の研究団体に属し、滋賀支部として活動していくことになりました。当初は友人と2人。何から始めていいか分かりませんでした。組織運営や資金など、考えることが山ほどでしたが、「性教育やりたい人この指とまれ!」と、色々な人たちに声をかけました。

そのころ、教育界では色々な教育のサークル活動が盛んでした。私も性教育だけではなく、教科の実践に役立つサークルのセミナーに出かけては、授業づくりに夢中になっていたものです。その勢いでサークル発足。活動は今でも継続中。27年目となります。

名前は「滋賀HALサークル」今でも、よく名前の由来を尋ねられることがあります。「HAL」は「ハル」と読みます。私たちのサークルが志したことは、「マイノリティーの性を大切にしよう!」でした。今でいう「多様な性」でしょうか。

「H」は、ホモセクシュアリティのH。「A」は、当時AIDSが社会問題になっていたから。「L」はレズビアンです。このような理由でつけたネーミングですが、今なら色々なところから、クレームがつきそうですね。現在、多様な性は「LGBTQ」などと表現していますが、性はグラデーションです。一人一人の性のあり方は自由で多様であることが、少しずつですが認識されつつあります。

私たちのサークルの目的は、

- 学校での性教育の理論と実践を積むための教材研究
- 性教育を推進・実践できる若い教員の育成
- 地域活動として、色々な市民活動の団体とも繋がり、より多くの人たちに性教育の必要性を伝えること 　　です。

私たちが本を出す？

サークル発足後、少しずつですが仲間も増えていきました。とりあえず母体の研究会のセミナーにできるだけ参加し、模擬授業を発表していくことから始めました。仲間のそれぞれの得意分野を生かしながら、教材作りにも励みました。

全国レベルのセミナーでの発表では、良い評価をもらったこともありますが、ほとんどは厳しい評価でした。参加者の多くは教員でしたが、医療や福祉施設の業界の人たちは、現場での状況から、よりリアリティーな実践を求めます。私たちは、マイノリティーを大事にと言いながら、障がい

児・者や養護施設の児童などの実態を知らないでいました。性教育を狭義に捉えていたことに反省ばかりでした。

ある時、こんな話が舞い込んできました。友人が発表した「男の子の性」がメディアの目に留まり、性教育の本を出さないかという誘いでした。その頃、本部研究会の勢いは最高潮。本部会員の人たちは、次々に実践本を出版していました。私たちにもそんなチャンスがきたなら、仲間とともに著してみたいと思っていました。



つづく